

ション構成により、将来人口推計に関連する今後の研究の方向性を感じることができた。また、国際推計会議は、研究者のみならず、人口統計担当部局の関係者や各国の政策担当者など、将来人口推計の実施担当者と利用者の双方が参加して開催された。そのため、推計手法に関する議論のみならず、いかにして推計結果を正しく国民や政策担当者に伝えるかといった観点からの議論も活発に行われた。また、近年、将来の不確実性を確率を用いて表現する確率推計の試みが多数なされており、研究報告に対する質疑応答にとどまらずセッション会場の外でも議論が交わされた。しかし、各推計で用いられている確率モデルには標準化されたものがあるわけではなく、推計における確率モデルの利用の是非についても見解が分かれることは印象的であった。

なお、同会議の報告スライドならびに論文は、国連欧州経済委員会のサーバー (<http://www.unece.org/stats/documents/2013.10.projections.html>) にて公開されている。

(福田節也 記)

第28回日本国際保健医療学会学術大会 シンポジウム 「日本・アジアの少子・高齢化社会と保健人材の国際移動」

沖縄県名護市名桜大学で、2013年11月2日(土)から4日(月)まで、第28回日本国際保健医療学会学術大会が開催され、3日(日)9:30~11:30には「日本・アジアの少子・高齢化社会と保健人材の国際移動」と題するシンポジウムが行われた。筆者が企画趣旨説明を行い、厚生労働省職業安定局派遣・有期労働対策部外国人雇用対策課の遠坂佳将氏が「我が国の保健人材の受入れ制度と現状について」、NPO法人AHPネットワークスの二文字屋修氏が「ニッポンにおける外国人看護師・介護(福祉)士の立場」、国際協力事業団(JICA)の石井羊次郎氏が「グローバルな保健人材開発と国際移動」、WHO 東南アジア事務局保健システム部長のモニール・イスラム氏がアジアにおける保健人材と移動に関する発表を行った後、フロアも交えた議論が行われた。医療人材は、先進国では人口高齢化により、発展途上国では育成・継続勤務制度の不備によりいずれも不足している中、途上国から先進国への保健人材の流れを規制するべきかどうか、看護人材・介護人材それぞれが抱える問題点、日本・アジアそれぞれの事情など、多くの論点が提示された。

(林 玲子 記)

シンガポールの人口高齢化の実態とその要因に関する資料収集

厚生労働科学研究費補助金(地球規模保健課題推進研究事業)による研究事業「東アジア低出生力国における人口高齢化の展望と対策に関する国際比較研究」の一環として、11月9日から11月16日にかけてシンガポールに滞在し、国立図書館やシンガポール政府移民局等を訪問し最新の統計資料収集を行った。また、滞在中にシンガポール大学統計学部でシンガポールにおける出生力変動の民族差に関して研究報告を行ったほか、シンガポール大学アジア研究所移動クラスターの主催で行われた「アジアとの人口移動の理論化」セミナーに出席し、専門家との意見交換を行った。いずれもシンガポールの人口高齢化の要因と展望に関し社会・政治・経済・文化的変動について専門的な意見交換を行うとともに、統計調査データ・論文・報告書を含む貴重な資料を収集できた点で成果があった。

(菅 桂太 記)